



TITLE:

表紙・投稿規定・編集後記・裏表紙ほか

AUTHOR(S):

CITATION:

表紙・投稿規定・編集後記・裏表紙ほか. 物性研究 1988, 50(6): 1178-1193

ISSUE DATE:

1988-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/93263>

RIGHT:

昭和42年11月14日 第四種郵便物認可
昭和63年9月20日発行(毎月1回20日発行)
物性研究 第50巻 第6号

ISSN 0525-2997

vol.50 no.6

物性研究

1988/9

1. 本誌は、物性の研究を共同で促進するため、研究者がその研究・意見を自由に発表し討論しあい、また、研究に関連した情報を速やかに交換しあうことを目的として、毎月1回編集・刊行されます。掲載内容は、研究論文、研究会・国際会議などの報告、講義ノート、研究に関連した諸問題についての意見、プレプリント案内、ニュースなどです。
2. 本誌に掲載される論文については、原則として審査を行いません。但し、編集者が本誌に掲載することを著しく不適当と認めたものについては、改訂を求め、または掲載を拒絶することがあります。
3. 本誌の掲載論文を他の学術雑誌に引用するときは、著者の承諾を得た上で **private communication** 扱いにして下さい。

投稿規定

1. 原稿は400字詰原稿用紙を使用し、雑誌のページ数を節約するために極力簡潔にお書き下さい。
2. 原稿は2部（オリジナル原稿及びコピー）提出して下さい。
3. 数式、記号の書き方は **Progress, Journal** の投稿規定に準じ、立体“ \square ”、イタリック“ — ”、ゴシック“ \sim ”、ギリシャ文字“ γ ”、花文字、大文字、小文字等を赤で指定して下さい。又特に区別しにくい o と a と 0 (ゼロ)、 u と n と r 、 c と e 、 l (エル)と 1 (イチ)、 x と \times (カケル)、 u と v 、 \dagger (ダガー)と $+$ (プラス)、 ψ と ϕ と Ψ と Φ 等も赤で指定して下さい。
4. 数式は3行にわたって大きく書いて下さい。
5. 1行以内におさまらない可能性のある長い数式等は必ず改行の際の切れ目を赤で指定して下さい。
6. 図はそのまま印刷できるもの（原則としてトレースされたもの）とそのコピーを本文と別に論文末尾に揃え、図を入れるべき位置を本文の欄外に赤で指定して下さい。図の縮尺、拡大は致しません。図の説明を含め1頁（ $13\times 19\text{cm}$ ）以内に入らないもの、そのまま印刷できない図は原則として著者に返送し、書き改めていただきます。図中の文字は活字にいたしません。図の説明は別紙に書き、原稿に添えて下さい。
7. 投稿後の原稿の訂正はできるだけ避けるようにして下さい。
8. 別刷御希望の方は投稿の際に50部以上10部単位でお申込み下さい。別刷代は別刷代金表（当会にご請求下さい）に従い、別刷を受取ってから1ヶ月以内に納めて下さい。（郵便切手による受付はいたしません。）
9. 原稿締切日は毎月5日で、原則として次月発行誌に掲載されます。

議 事 録

第 13 期物研連物性物理専門委員会報告

1. 委員会成立の経過¹⁾

日本学術会議は第 13 期に大きな機構改革が行われた。会員の決定が有権者による直接選挙制から各学会からの推薦制に変わり、同時に研究連絡委員会が法制化され拡充された。物理学研究連絡委員会は定員が 75 名となり、その中に物性物理専門委員会（定員 21 名）がおかれることになった。

物性物理専門委員会は第 4 部物性関係会員（1 名）、日本物理学会推薦委員（8 名）、物性グループ推薦委員（9 名）、日本応用磁気学会推薦委員（1 名）、物性研究所長（1 名）、補充委員（1 名）により構成された。このうち物理学会推薦委員は物理学会会員の選挙で、物性グループ推薦委員は物性グループ百人委員の選挙で、補充委員は専門委員会において選ばれた。専門委員会は上記 21 名の委員に IUPAP 専門委員のうち物性関係委員が加わって開催されることになった。委員名はつぎの通りである。

会員：中嶋貞雄

物理学会推薦：勝木 渥、金森順次郎、川路紳治、信貴豊一郎、

鈴木増雄、伊達宗行、中井祥夫、中村輝太郎

物性グループ推薦：槽谷忠雄、合田正毅、佐藤清雄、三本木 孝、長岡洋介、

中山正敏、三輪 浩、 禅 素英、渡部三雄

日本応用磁気学会推薦：杉本光男

物性研所長：豊沢 豊（のち守谷 亨に交代）

補充委員：加藤範夫

IUPAP 委員（物性関係）：石川義和（任期中死去）、上村 洸、久保亮五

1985 年 9 月 6 日第 1 回物研連委員会全体会議と専門委員会が開催され、全体会議で委員長が、専門委員会で委員長の指名により幹事がつぎのように決定した。

委員長：中嶋貞雄

幹事：川路紳治、伊達宗行、長岡洋介

2. 委員会の活動

専門委員会は物研連の全体会議が開かれるのにあわせて、計 8 回、いずれも日本学術会議会議室において開催された。²⁾

第 1 回 1985 年 9 月 6 日

第 2 回 1986 年 1 月 10 日

第 3 回 同年 6 月 18 日

第4回 同年 11月12日

第5回 1987年2月23日

第6回 同年 6月11日

第7回 同年 11月12日

第8回 1988年2月18日

委員会における主な審議事項はつぎの通りである。

(1) 物性小委員会との関係

物性小委員会は物研連のもとにおかれ、物性グループの中心として活動してきた。専門委員会は物小委の果してきた役割のうち共同利用研委員の推薦等の“公”的な部分を引き継ぎ、物小委は物性委員会と改称して物性グループ内の委員会として活動を続けることになった。

(2) 共同利用研委員の推薦

(1)の決定に基づき、各研究所長からの依頼により物性研究所協議会委員、同人事選考協議会委員、基礎物理学研究所運営委員会委員の推薦を行った。物性研共同利用施設専門委員会委員、基研研究部員は従来通り物性グループ百人委員の選挙によって推薦した。

(3) 大型施設将来計画の検討

中性子、放射光等の物性関係大型施設の計画を検討するためワーキング・グループを設けた。委員はつぎの通りである。

委員長：伊達宗行

一般委員：糟谷忠雄、上村 洸、川路紳治、加藤範夫

専門家委員：石川義和、永嶺謙忠、星埜禎男、石井武比古、遠藤康夫（石川委員死去ののち補充）、山田安定

委員会はワーキング・グループの報告に基づき審議した。原研改3号炉設備計画、大型ハドロン計画（パルス中性子物性、ミューオン物性を含む）についてはその推進を支持することを決定した。

(4) 基礎研究将来計画の検討

物性研究においては大型施設の計画とともに中小規模の基礎研究の充実が重要であるとの認識から、「物性物理における基礎研究」ワーキング・グループを設けて検討をすすめた。委員はつぎの通りである。

委員長：金森順次郎

委員：佐藤清雄、長岡洋介、小林俊一、新庄輝也、仁科雄一郎、守谷 亨、
竹内 伸

審議の詳細は議事録を参照されたい。²⁾

将来計画（(3)と(4)）については1987年11月30日、12月1日の両

日、物性研究所において研究会を開催し、討議を行った。³⁾

3. 大型施設計画ワーキング・グループの活動⁴⁾

物性物理学は研究対象の多彩性を反映して個々の研究者の独創性と独自性に重点を置くいわゆるスモールサイエンスが基本だが、近年いくつかの大型で高価な施設、機器の必要性が無視できなくなっている。そこで表記のワーキング・グループを作り、この問題の検討を行った。討議の結果早急に検討すべき課題としてつぎの4件について調査する事となった（括弧内は所要粒子線発生機器）。

(1) 中性子物性（原子炉）

(2) パルス中性子物性（加速器）

(3) 放射光物性（加速器）

(4) ミュオン物性（加速器）

以下、これらについての検討状況についてのべる。

(1) 原子炉を用いた中性子物性は2つの問題がある。第1に国内原子炉問題で、これは現在東海村でいわゆる原研改造3号炉の工事が進行中であり、これに設置される中性子回折装置の整備が最重点であると結論される。したがって約20億円をかけて物性研を窓口とした整備計画を推進するよう物研連に報告し、了承された。これはほぼ順調に進行している。第2の問題は国際協力問題で、米国オークリッジANS計画では約600億円をかけて次世代の中性子回折原子炉を日本と共同で作りたいという提案、および日仏間でのやや小型ながら似たような課題について検討した。計画それ自体に未定要素はあるが、国内で将来大型原子炉を作りにくい現状をふまえ、これらの国際協力を積極的に推進すべきであるとの事で意見が一致した。

(2) パルス中性子については現在、大型ハドロン計画、すなわち原子核研究所を転換し、新しい加速器群を筑波地区に作ろうという案に乗り、この中でパルス中性子発生ビームを確保して従来から検討されて来たKENS-II計画を実現するのがよい、との結論を得た。現在関係者間での協議が進行中である。

(3) 放射光問題については、物性研究の立場からすると高輝度X線を利用する構造解析と真空紫外を用いる分光学（以下VUVと略す）の両面がある。物性研では従来よりVUV中心であるが、この推進はKEKに1GeVリングを新設するのが理想だが、過渡的にはKEK-PF 2.5GeVを1.5GeVに下げて運転する案が検討されている。しかし一方では1～3GeV級のものを広島、あるいは仙台に作ろうとの案、あるいは大型（6～8GeV）のものを関西に作ろうとの案、さらにはKEK-PFの将来計画として10GeVスーパーPF案などが出されており、学問的、行政的な整理が必要となった。その対策の一つとして1987年11月18日に日本学術会議において物研連を中心としたシンポジウムが開かれた。

(4) ミュオン物性についてはパルス中性子と同じく大型ハドロン計画の中で考えようという事で意見が一致した。これについても関係者の間で協議が進行中である。

4. 基礎研究ワーキング・グループの活動⁴⁾

1986年6月18日に開催された物理学研究連絡委員会物性物理専門委員会の決議に基づいて標記ワーキング・グループが発足した。このグループの作業目的は、さきに発足した「大型施設計画」ワーキング・グループと相補的に、物性物理学の分野でのスモールサイエンスに属する研究について、その充実発展のための方策を検討することであった。グループは同年9月10日物性研で「大型施設計画」ワーキング・グループとの合同の会合および第一回の会合をまず開催し、また1987年2月23日午前に第2回会合を開催するとともに、文書による相互連絡で具体案のとりまとめを行った。これらの討議の内容は逐次物性物理専門委員会および物研連に報告して大綱の承認を得たが、最終的に1987年6月11、12日の両委員会に報告を提出し承認を得た。

報告では、わが国の物性研究にとって、現在最も整備を必要としているのは、大型施設は別として、共同利用性の高い中型の汎用研究機器であることを指摘し、第一にそれらを具体的にリストアップして、必要な予算規模を推定した。第二にこれらの研究機器は一カ所に集中するのではなく全国的視野で設置される必要があることを指摘し、これらのハードウェアを共同利用するための有効な一般方策（ソフトウェア）として、新設あるいは既存の各種研究施設に新しい共同利用機能（地域共同利用）を付与することを提案した。さらに運営システムとして「地域共同利用施設」群を緩やかに結び付ける「地域センター」（国分寺）設置の構想を提案した。日本学術会議は第102回総会（1987年4月22～24日）で「地域型研究機関（以下では地域センターという）の設立について」という勧告採択したが、それに述べられている地域型研究機関は、我々の意図する地域共同利用機能と他方では特定の地域の集中的研究という二つの可能性を含んでいる。また地域産業との産学共同等を目指した研究センターが昭和62年度に幾つかの大学で設置される運びになっている。物性物理学の場合、その研究の規模が比較的小さく、また研究対象が多岐に亘っていて、各地の大学その他が独自の研究を推進するのが最も有効な分野であることと、多様な物性測定という研究の性格からかなり高額の共同利用に適した中型研究機器を数多く必要とすることから、「地域センター」という一般計画の背景の中での一つのモデルケースとして物性物理学の計画を推進することを提案した次第である。したがって我々の報告は物性物理研究のために最も適した形の組織としての「地域センター」の具体案を論じたものである。

このような一般論を展開した報告を提出した後に、ワーキング・グループのメン

バー以外の人に加わって、共同利用研究所および各地の大学で上に述べた中型研究機器ないしは「地域共同利用施設」がどのような形で設置することが可能であるかという検討を行った。³⁾

さらに物性物理としての研究推進のために、新しい情報交換・相互援助のための非公式な組織を作ることも提案されたが、その具体化は今後の議論待ちである。

1) 委員会成立の経緯については、

中嶋貞雄「学術会議・物研連報告」事務局報1984-No. 6。

2) 専門委員会議事録は物性グループ事務局報、物性研だより、物性研究に掲載されている。

第1回～第4回：事務局報1987-No. 9、だより27-1、
研究48-2。

第5回、第6回：事務局報1987-No. 1、だより27-5、
研究49-4。

第7回：事務局報1988-No. 3、だより28-4、研究50-6。

第8回：事務局報1988-No. 4、だより28-4、研究50-6。

3) 研究会報告 物性研だより27-6。

4) 報告書が物性研だより28-3(1988年9月)に掲載されている。

第7回物性専門委員会(第13期)議事録

1987年11月12日(木) 13時55分～16時30分

出席者 長岡洋介 禅素英 勝木 渥 合田正毅 佐藤清雄 中井祥夫 伊達宗行
 杉本光男 信貴豊一郎 糟谷忠雄 三輪 浩 中山正敏 久保亮五
 中嶋貞雄 金森順次郎

中嶋委員長の出席が遅れたため、長岡監事が議長を代行、記録は三輪委員に依頼して会議を行なった。

1 前回議事録は、準備が遅れたため郵送により承認を得ることとした。

2 報告(長岡監事)

物性研に短期研究会「物性研究の将来計画」を申請し、認められた。本委員会委員には参加を依頼する。

3 審議

3-1 物性研人事選考協議会委員の推薦

物性研所長から学術会議会長あて標記委員推薦の依頼があった。今回から物性研の内規が変わり、委員は2年任期で毎年約半数の交替となった。今回は5名のうち3名を2年任期、2名を1年任期の委員として推薦する。

討論の結果、理論2、実験2、共通1の枠で5名連記の投票を行ない、各枠上位1名を2年任期委員として推薦することとした。投票の結果

理論	渡部三雄	(2年)	長岡洋介	(1年)
実験	伊達宗行	(2年)	小林俊一	(1年)
共通	遠藤康夫	(2年)		

を選出、物研連全体会議へ報告することとした。

3-2 大型施設将来計画

伊達WG委員長から、「中間報告その5」に基づき報告があった。

- 1) 他研連とも共催で放射光計画についてのシンポジウムが開かれる。これに伴いWG報告はシンポジウムでの討論をふまえた上でまとめ、次回委員会に提出したい。
- 2) 放射光計画。新しくKEKからsuperPF計画が出された。これはトリスタンの内側に10 GeVのリングを設置するもので、既設の諸設備が利用できるため、通常の半分の費用(300億)でできるとのことである。

物性研-KEK 共同のVUV計画に新しい構造が出ている。これは現在の2.5GeV PFの運転時間を延長し、一部1.5GeV程度に下げて使う時間帯を作り、これをVUVに利用するというものである。

- 3) 中性子計画。グルノーブルの原子炉SILOEの改修に当り、予算(約12億円)の1/3を日

本で負担しないかという話がきている。これには日英協力程度の規模での関わり方が望ましいと考えている。

- 4) WG委員の追加。前回、星埜委員に代って山田委員に出席を依頼したが、星埜委員にも引き続き出席していただくこととした。

以上の報告に基づき討論が行われ、つぎのような発言があった。

- KEK はsuper PFは固有の計画、大型ハドロンは外から持ちこまれたものと考えているが、大型ハドロン計画にももっと積極的な姿勢がほしい。
- VUV 計画がKEKの事情でおくれるようなら、別の形たとえば物性研が自力で進めることも必要なのではないか。

3-3 第14期物研連物性専門委員の選出法について

中嶋委員長から、物研連役員会が作成した「案」について説明があった。「案」は前回とはほぼ同様で共同利用研所長をex officioの扱いをしない点だけが異なる。

物性関係では、IUPAP 委員に4名、専門委員は21名で、専門委員の内訳は学会会議会員（未定）、IUPAP 役員（2名）、物理学会からの推薦（8名）、残りが研究者グループ、他学会からの推薦になる。

以上の報告に基づき討論が行われ、現在の物研連委員に文部省関係以外の研究所や民間等の研究者代表が少ない、現在の物性グループは物性研究者の大半を組織していない、等の指摘があった。

討議の結果「案」を了承し、推薦は従来通り物性グループに依頼することとした。

以 上

第8回物性専門委員会(第13期)議事録

日 時：1988年2月18日(木)13時40分～16時40分

出席者：中嶋貞雄（委員長） 勝木渥 加藤範夫 糟谷忠雄 川路紳治 信貴豊一郎 伊達宗行
中井祥夫 中村輝太郎 中山正敏 長岡洋介 守谷亨 三輪浩 禅素英
久保亮五（IUPAP専門委員）

1. 前回議事録（当日配布）を誤字、脱字等を修正の上承認した。

2. 報 告

2-1 委員長報告（中嶋委員長）。

物研連役員会で、1988年度の物理学関係国際会議派遣者数は4名プラス α と決まった。

最終案はIUPAP専門委員会でまとめることになる。これまでの原則「IUPAP コミッション・メンバーを派遣する」に従えば、半導体国債会議に上村洸氏（Commission Chairman）を、磁性国際会議に守谷亨氏（Commission Member）を派遣する可能性が大きい。

2-2 大型施設の将来計画－中間報告（伊達委員）（資料－中間報告－その6）

- a) 放射光将来計画シンポジウムが昨年11月18日に日本学術会議講堂で行われた。6グループの計画報告の後、パネル討論が行われ、「各省庁の壁を破る」目的は達成された。
- b) 中性子散乱について、山田安定氏から米国で進行中のCNR（ANS）計画への参加に関連してアンケート調査をしたいとの申し出があり、約千名を対象として実施することになった。
- c) ワーキング・グループの最終報告案を3月中にまとめる予定。

2-3 物性研短期研究会について（長岡委員）

「物性研究の将来」短期研究会が昨年11月30日、12月1日に行われた。その報告は「物性研だより」3月号に印刷される予定。

2-4 物性グループによる選挙について（長岡委員－物性グループ事務局）

- a) 百人委員による物性研究所共同利用施設専門委員会委員の選挙（昨年12月24日開票）の結果、下記の8名を日本学術会議会長に報告する。

長坂慎一郎（山形大理）、藤田敏三（広大理）、長岡洋介（名大理）、永田一清（東工大理）、都福仁（北大理）、好村滋洋（広大総合科）、平井章（京大理）、寿栄松宏仁（東大理）。

- b) 百人委員による基礎物理学研究所研究部員の選挙（昨年12月24日開票）の結果、下記の5名を日本学術会議会長に報告する。

福山秀敏（東大物性研）、藤川高志（横国大工）、望月和子（阪大基礎工）、大川房義（北大理）、米沢富美子（慶応大理工）。

- c) 新登録者1554名に在る物性グループ百人委員の選挙が行われ、1月18日開票の結果、新百人委員127名が決った。その名簿は「物性グループ事務局報－1988－2号」に印刷されている。

3. 審 議

3-1 第13期物研連の活動報告について

中嶋委員長から、物研連役員会案として、「第13期物研連の活動の締めくくりとして、久保委員長名で物理学誌に活動報告を書く。そのための資料を各専門委員会がまとめる」との方針が提案された。審議の結果、物性専門委員会はこの案を了承し、資料としては各ワーキング・グループの報告の要約を提出することになった。この件に関連して、金森グループの報告としては、昭和62年6月11日に物性専門委員会に提出した報告（いわゆる国分寺構想）で十分である、との金森委員の見解が伊達委員から紹介された。また、伊達委員から、伊達グループは3月中に会合を持ち、今期報告をまとめる予定であるとの報告があった。

3-2 物性専門委員会の活動報告について

長岡委員から、物性専門委員会としての活動報告を書き、「物性グループ事務局報」または「物性研究に印刷公表してはどうか、との提案がなされ、審議の結果了承された。また、この報告を書く作業は、長岡、川路両幹事に依頼された。

3-3 物性研究の将来計画について

a) 物性研究所における大型計算機の新設について

守谷委員から、物性研究専用の計算センターの新設を昭和63年度概算要求に提出するので、物研連として支持して欲しい、との提案があった。その内容は、スーパーコンピューター2台（その中の1台はプロジェクト研究専用）と汎用機1台で、レンタル料は月額6千万円である。審議の結果、守谷委員に物性研の現状、大型計算機の必要性、設置後に期待されること、および概算要求に至る経過等を示す文書を求め、物性専門委員会として検討することになった。

c) 放射光施設の将来計画について

放射線光施設計画をめぐって、情報、意見の交換が活発に行われた。

3-4 その他

a) 分子科学研究所学会等連絡会議構成員の推薦について

中嶋委員長から説明があり、意見交換の後、物理関係構成員2名の推薦を久保物研連委員長に一任することになった。

b) 第14期物性専門委員会委員の選出について

中嶋委員長から物研連委員会案（第13期の方法に準じ、その最終調整を物研連役員と第14期学術会議会員で行う）が紹介され、了承された。

以上

基研研究員・湯川奨学研究員公募に応募するに際しての注意

基研研究員と湯川奨学研究員は、実質的には同じものです。奨学金は、湯川財団から支給されますが、研究場所は基礎物理学研究所です。

応募者は、次の手続きをとって下さい。

- 1 基研に提出するもの： 基研研究員申請書
- 2 湯川財団に提出するもの： 1) 湯川記念財団奨学研究員申込書
2) 発表論文リスト
3) おもな論文の別刷
4) 研究計画

以上各2通

詳細については、募集要項をご覧ください。

公 募 通 知

昭和64年度基研研究員を下記により募集いたしますので、関係者各位に周知方よろしくお取り計らい願います。

なお、ご参考までに基研研究員制度内規等を添付いたします。

昭和63年10月11日

京都大学基礎物理学研究所長

西 島 和 彦

記

1. 応募資格 当研究所において研究に従事することのできる者で、採用時に博士の学位を取得している者または博士課程（後期）に3年以上在学した者であって、かつ、常勤的な職についていない者（博士課程に在学中の場合は採用時に退学していただきます。）

2. 採用人員 3 名。

本研究員は、原則として湯川記念財団奨学研究員に採用された者をもって充てる。

- 3・採用期間 昭和64年4月1日より1年間とするが、場合により1年に限り更新することができる。

- 4・待 遇 基研研究員に採用された者には、日本学術振興会特別研究員制度による大学院博士課程在学者に対する奨励金と同額程度の研究奨励金が支給される。

- 5・公募締切 昭和63年12月12日（月）必着

6. 選 考 昭和64年1月下旬開催の基礎物理学研究所運営委員会において選考し、本人に通知する。

7. 応募書類 イ、申請書（別紙様式による）

ロ、履歴書

ハ、発表論文リスト（共著論文の場合は共著者名を明記すること。）

ニ、主な論文別刷

ホ、研究計画（なるべく具体的に記すこと）

以上各2部

8. 宛 先 〒606 京都市左京区北白川追分町

京都大学基礎物理学研究所長

西 島 和 彦

- 追 記 1. 上記応募書類のうちロ～ホは省略することができます。
2. 郵送の場合は封筒に基研研究員応募と朱書のこと。
3. 応募書類はお返しいたしません。
4. 詳細は基礎物理学研究所共同利用事務室に問い合わせのこと。

電話075（753）7008

基研研究員制度内規

(昭和55年12月 8日協議員会制定)
(昭和60年10月 7日一部改正)
(昭和62年10月12日一部改正)

第1条 基礎物理学研究所に若干名の基研研究員（以下「研究員」という。）を採用する。研究員に採用される者は、博士の学位を取得した者または博士課程に3年以上在学した者で、かつ、常勤的な職についていない者とする。ただし、採用期間中は博士課程に在学することはできない。

第2条 研究員は、基礎物理学研究所において研究に従事するものとする。

第3条 研究員の任期は1ケ年とする。但し、場合によりその任期を1ケ年以内に限り更新することができる。

第4条 研究員には、日本学術振興会特別研究員制度による大学院博士課程在学者に対する奨励金と同額程度の奨励金が支給される。

第5条 採用は公募によるものとし、候補者の選考は基礎物理学研究所運営委員会において行なう。

第6条 本内規の運用につき必要な事項は、基礎物理学研究所協議員会において定める。

基研研究員制度の運用について

(昭和55年12月 8日協議員会決定)
(昭和56年10月12日一部改正)
(昭和60年10月 7日一部改正)
(昭和62年10月12日一部改正)

本制度は、当分の間、下記のとおり運用する。

記

1. 研究員の総数は、毎年度約3名とする。
2. 本研究員は、原則として湯川記念財団奨学研究員に採用されたものをもって充てるものとし、日本学術振興会特別研究員制度による大学院博士課程在学者に対する奨励金と同額程度の研究奨励金が支給される。
3. 研究員任期の更新（1年以内）については、各年度後半の適当な時期に、個々の研究員について審査のうえ、本人に通知する。
4. 欠員を生じた場合は、年度途中において公募を行うことができる。

(別紙様式)

昭和 年 月 日

基 研 研 究 員 申 請 書

このたび、別紙関係書類を添えて基研研究員に応募しますのでよろしくお願い
します。

氏 名

生年月日

最終学歴

現在の所属・身分

研究分野

連絡先(〒)

TEL

京都大学基礎物理学研究所長

西 島 和 彦 殿

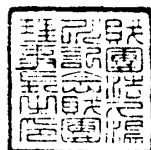
1988年10月18日

基礎物理学関係各研究所長殿

各大学物理学教室主任殿

財団法人 湯川記念財団

理事長 湯 浅 佑



湯川記念財団奨学研究者募集について

このたび下記要項により1989年度本財団奨学研究者を募集することになりましたので、貴部内関係者に周知かたよろしくお願いします。

なお当研究者は原則として基研研究者として採用されます。

記

研究者募集要項

1. 応募資格

大学院博士課程修了者及び1989年修了予定の理論物理学研究者
(この研究費は大学院博士課程修了者にその研究の完成を援助する目的をもって重点的に交付されるいわゆるPost Doctorial Fellowshipとして支給されるものである)

2. 支給月額

月額 123,000円

支給期間は1年間を原則とするが、場合により1年延長することがある。

3. 研究場所

基礎物理学研究所において研究することを原則とする。

4. 募集人員

3名 (内訳はだいたい素粒子論2名、物性論1名、中間の領域については適宜定める)

5. 応募書類

①申込書(別紙様式による)

②発表論文リスト

共著論文の場合は共著者名を明記すること 各2部

③おもな論文の別冊

④研究計画(なるべく具体的に記すこと)

以上各2部を1988年12月12日(月)までに、〒606京都市左京区北白川小倉町50の227湯川記念財団に必着するよう送付のこと。他に奨学金その他の収入のある場合は必ず書き添えること。

6. 審査

審査は基礎物理学研究所運営委員に依頼し、1989年1月下旬に選考して本人に通知する。

追記 応募書類はお返しいたしません。

1988年10月

財団法人 湯川記念財団

(別紙様式)

湯川記念財団奨学研究者申込書

このたび別紙関係書類を添えて貴財団奨学研究者に応募しますので
よろしくお願いします。

年 月 日

本 籍

現住所(〒)

氏 名

印

昭和 年 月 日生

財団法人 湯川記念財団

理事長 湯 浅 佑 一 殿

略 歴

氏名

昭和 年 月 日生

高等学校	昭和 年 月 高等学校 課程卒業
大学	昭和 年 月 大学 学部入学
	昭和 年 月 大学 学部 学科卒業
大学院	昭和 年 月 大学大学院 研究科入学 専攻科目（具体的に） 昭和 年 月博士課程修了；見込
専門分野	（該当するものを丸で囲んでください） 素粒子：原子核：物性：天体核： その他（具体的に）

編集後記

今年は南米沖合のエル・ニーニョが消滅し、普通の日本の夏が見込まれたのだが、ジェット気流の蛇行の影響とかで結局不順な天候となった。特に東日本では梅雨が明けきらないまま夏が終るかにみえる。ここ京都はまだ夏らしい日もあった方だ。また巷の話題としては大方の予想に反し中日ドラゴンズに優勝のマジック・ナンバーが点灯した。最良のチームなのでこちらの番狂わせは大歓迎だ。

このところ刊行も遅れ気味で上のような話題も刷り上がったときには色褪せているかもしれない。しかし遅れを取り戻す努力は続けられており、かなり回復しつつある。このところの超伝導フィーバーに続くようなトピックスはこの夏なかったようであるが、落ち着いた秋の始まりとともに、生じ、進展し、深まる各方面の研究の現状をすみやかに伝えていきたい。

(T. T.)

物 性 研 究 第50巻第6号 (昭和63年 9月号) 1988年9月20日発行

発行人	小 貫 明	〒606	京都市左京区北白川追分町 京都大学湯川記念館内
印刷所	昭和堂印刷所	〒606	京都市百万辺交叉点上ル東側 TEL(075) 721-4541~3
発行所	物性研究刊行会	〒606	京都市左京区北白川追分町 京都大学湯川記念館内
年額	15,600円		

編集後記

今年は南米沖合のエル・ニーニョが消滅し、普通の日本の夏が見込まれたのだが、ジェット気流の蛇行の影響とかで結局不順な天候となった。特に東日本では梅雨が明けきらないまま夏が終るかにみえる。ここ京都はまだ夏らしい日もあった方だ。また巷の話題としては大方の予想に反し中日ドラゴンズに優勝のマジック・ナンバーが点灯した。最良のチームなのでこちらの番狂わせは大歓迎だ。

このところ刊行も遅れ気味で上のような話題も刷り上がったときには色褪せているかもしれない。しかし遅れを取り戻す努力は続けられており、かなり回復しつつある。このところの超伝導フィーバーに続くようなトピックスはこの夏なかったようであるが、落ち着いた秋の始まりとともに、生じ、進展し、深まる各方面の研究の現状をすみやかに伝えていきたい。

(T. T.)

物 性 研 究 第50巻第6号 (昭和63年 9月号) 1988年9月20日発行

発行人	小 貫 明	〒606	京都市左京区北白川追分町 京都大学湯川記念館内
印刷所	昭和堂印刷所	〒606	京都市百万辺交叉点上ル東側 TEL(075) 721-4541~3
発行所	物性研究刊行会	〒606	京都市左京区北白川追分町 京都大学湯川記念館内
年額	15,600円		

会員規定

個人会員

1. 会費：当会の会費は前納制をとっています。したがって、3月末までになるべく1年間分会費を御支払い下さい。
なお新規入会お申込みの場合は下記の会費以外に入会金として、100円お支払い下さい。

1年間の会費

1st volume (4月号～9月号)	4,200円
2nd volume (10月号～3月号)	4,200円
	計 8,400円

(1年分まとめてお支払いが困難の向きは1 volume 分ずつでも結構です)

2. 支払いの際の注意：なるべく振替用紙を御利用の上御納入下さい。
(振替貯金口座 京都1—5312) (現金書留は御遠慮下さい)
なお通信欄に送金内容を必ず明記して下さい。
雑誌購読者以外の代理人が購読料を送金される場合、必ず会員本人の名前を明記して下さい。
3. 送本中止の場合：次の volume より送本中止を希望される場合、かならず「退会届」を送付して下さい。
4. 会費の支払遅滞の場合：当会の原則としては、正当な理由なく2 Vols. 以上の会費を滞納された場合には、送本を停止することになっていますので御留意下さい。
5. 一括送本を受ける場合：個人宛送本中に大学等で一括配布を受けるようになった場合は、必ず「個人宛送本中止、一括配布希望」の通知をして下さい。逆の場合も同様です。
6. 送本先変更の場合：住所、勤務先の変更等により送本先が変わった場合は、必ず送本先変更届を提出して下さい。

学校、研究所等機関会員

1. 会費：学校・研究所等での入会及び個人であっても公費払いのときは機関会員とみなし、代金は、1冊 1,300円、1 Vol. 7,800円、年間15,600円です。この場合、入会金は不用です。学校、研究所の会費の支払いは後払いでも結構です。入会申込みをされる時、支払いに請求、見積、納品書が各何通必要かをお知らせ下さい。
なお、当会の請求書類では支払いができない様でしたら、貴校、貴研究機関の請求書類を送付して下さい。
2. 送本中止の場合：発行途上にある volume の途中送本中止は認められません。退会される場合には、1ヶ月前ぐらいに中止時期を明記して「退会届」を送付して下さい。

雑誌未着の場合：発行日より6ヶ月以内に当会までご連絡下さい。

物性研究刊行会

〒606 京都市左京区北白川追分町 京都大学湯川記念館内

☎ (075)751-2111 内線7051 (075)722-3540(直通)

物 性 研 究 50—6 (9月号) 目 次

○講義ノート

「擬一次元導体の物性」……………三本木 孝………… 963

○修士論文題目・アブストラクト(1987年度) その2……………1002

○修士論文 (1987年度)

空間分解法による励起子の空間伝播の直接観測…河相 武利…………1130

○議事録

第13期物研連物性物理専門委員会報告……………1178

第7回物性専門委員会(第13期)議事録……………1183

第8回物性専門委員会(第13期)議事録……………1185

○掲示板

基研研究員・湯川奨学研究員公募について……………1187

○編集後記……………1193

物 性 研 究 50—6 (9月号) 目 次

○講義ノート

「擬一次元導体の物性」……………三本木 孝………… 963

○修士論文題目・アブストラクト(1987年度) その2……………1002

○修士論文 (1987年度)

空間分解法による励起子の空間伝播の直接観測…河相 武利…………1130

○議事録

第13期物研連物性物理専門委員会報告……………1178

第7回物性専門委員会(第13期)議事録……………1183

第8回物性専門委員会(第13期)議事録……………1185

○掲示板

基研研究員・湯川奨学研究員公募について……………1187

○編集後記……………1193